

【リハビリ】蕎麦をズル
ズルと

カリカリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴローちゃんに蕎麦を食わせるだけ

目次

蕎麦をズルズルと

1

蕎麦をズルズルと

ひゅうと風の音が聞こえる。空のお日様は良く照つているといふのに、ここら一体はそれを感じさせないほどに寒い。室内で温まつていた体が一気に冷えていくようだ。手を擦つて息を吐く。商談も終わり多少の暇ができた俺は、何となく公園をぶらついていた。

近くにあつた木の椅子に座つて周りを見てみる。見えるのは子供やら、遊具やら。体を落ち着けて耳を澄ましてみると、小さく、楽しそうな声が聞こえてくる。子供は風の子とはいうが、こんな日でも半袖で走り回つてのを見ると、流石に我慢してゐるんじゃないのか。なんて思つたりする。そういやあ、さっきの商談先の人はちよいちよい咳き込んでいたな。

ぼうつと何もすることなく椅子に座る。どうも、何ともいえない倦怠感に体が包まれている気がする。疲れているからか、それとも風邪でも引いたのか。

(いや、これは違うな)

これは腹が減つて力が出ないんだ。昼飯もまだだった。なら、腹を満たすために適当に飯屋でも探すことにしよう。くいつと首を捻つてから椅子から立ち上がる。飯屋探

しの始まりだ。

公園を出発した俺は狭い道路を通り、開けた所に出た。道中に定食屋があつたが、席が空いていなかった。そこでも良かったんだけどな。右に曲がり、そのまますすぐ進む。コンビニ。文房具屋。適当な物を視界に入れて歩いていると、右にラーメン屋、信号路をはさんだ左に蕎麦屋を見つけた。

ふうむ、選択肢としてはどちらも中々悪くはない、体があつたまる物を食べたかつたんだ。さて、どちらにしようか。近いのはラーメン屋で遠いのは蕎麦屋。渡るのも面倒だしラーメン屋にしようかとも思ったが、蕎麦屋の『立ち食い蕎麦』という文字列に目を引かれた。ふうむ立ち食いか。ちやつと食べてきつと出ていくイメージ、早く飯が出てくるかな？

俺の腹も早く何かを食べたいと思っっているだろう。よし、決まりだ。蕎麦屋にしよう。信号を渡って蕎麦屋の下へと歩く。真っ黄色の看板に茶色の引き戸。店前へと辿り着いた俺は戸をガラリと引き開けた。

目の前に映つたのは大きな食券販売機。それと視界の端には箸の入れ物などが置かれたテーブル席が見える。立ち食いと書いていたが普通に座れるらしい。

横の壁には蕎麦やうどん等の写真がある。様々な丼のセットメニュー、鍋焼き、すき焼きうどんと種類は豊富だ。今回はセットにしてみるかな。そうして券売機に視線を

戻す。

とりあえずちやつと決めてしまおう、腹が空いて仕方がないんだ。腹に溜まりそうなから揚げ丼セット、蕎麦は大盛りにしておこう。

ピツピツとボタンを押して、落ちてきた食券を手に取り、券売機の横を通っていく。店のおばちゃんに会釈をしてからそれを渡す。

「これで。後、かけそばで」

「はい、かけそばね」

渡した後は近くの横長のテーブル席に座り、蕎麦が出来るのを待つ。視界の上にはテレビがあり、ニュース番組を流している。

「——線で人身事故が発生し、各電車に遅延——」

意識を薄ぼんやりとさせながらのんびりと待つ。周りは静かで、今はニュースキャスターの声と調理の音しか聞こえていない。こういう、何にもせずただ飯を待つだけの時間、嫌いじゃない。ああ、水でもコップに入れておこうか。立ち上がって、ガラスのコップを取りに行く。そして水を入れて席に戻って。

「から揚げ丼セットのお客様——」

そんな風にしてれば時間はすぐに過ぎていく。さすが立ち食い蕎麦、予想通りすぐに来てくれた。俺は自分の飯を取りに行くために、再度席を立ち上がった。

【かけそば】

汁が美味しい温かい蕎麦。うどんといいラーメンといい、ほかほかの麺類は人を安らげてくれる。

【から揚げ丼】

揚げ物にタレの混ぜった卵、それらとよく絡む米の組み合わせは最高だ。勿論ボリユーム満点。ガッツリくる。

【漬け物】

入れ物にたくさん詰まったきゅうりの漬物。ポリポリとして美味しい。

うん、期待通りだ。どっちもいかにもって感じの盛り付け。そしていい香り。空きっ腹には大変よろしい。

「いただきます」

手を合わせて礼を一つ。箸を手に持ち蕎麦を一口ズルズルとすすする。口内に汁と蕎麦の味と香りがすうつと広がっていく。うん、美味しい。もう一口ズルズル。ほっとする味、溜め息が漏れる。

次は丼の方へと箸を向ける。卵を軽く米と混ぜて絡めてから、一口分をとて口の中に放り込む。もくもくと咀嚼、少し固めの米がトロツとした卵とよく合っている。甘めのタレも相性抜群だ、美味しい。今度は唐揚げもご一緒に、ガッツリと。うん、丼物の肉つ

て感じの味付け。タレが染みた衣が美味い。

口の中がこつてりしてきたので蕎麦の汁でリセット。顔を近づけてズズツとすする、出汁の効いた醤油味。くどくないあっさりとした味の汁は、口内の掃除役に最適だ。

そして次は蕎麦をズルツとすする。その次に丼をもぐもぐと食べる。次にはまた蕎麦、また丼、蕎麦、丼……と続けていく。そばを嚼る度に口内がリセットされ、すすきりとした感覚が残る。食事の反復運動は、箸を動かせば動かすほどペースが上がっていく。

そうして食べていると、視界の端にある入れ物が目に入ったりする。漬け物が目一杯詰まっている入れ物。……そうだ。

俺は入れ物に入っていたトングで漬け物を掴み、まだ半分ぐらい残っている丼の中へと放り込む。そして箸で漬け物を全体に混ぜ、口へとかきこんでいく。

タレご飯に、コリコリとした漬け物。うん、歯応えがあつていい感じだ。ようし、一気に食べてしまおう。俺は箸をより速く箸を動かし、黙々と食べていった。

むしやむしや、もぐもぐと。夢中になつていっているうちに一気に食べ終えてしまった。うん、美味かった。腹いっぱい食べた。口内を汁と水で流し、軽く一息つく。

「いちそうさまでした」

そうして俺は席を立ち上がり、食器を載せた盆を返却し、店を出た。

外では冷たい風が吹いているが、そばを食べて温まった俺の体を冷やすにはまだまだ不足だ。温い温い。

といつても寒いことには変わらない、この温もりが続いているうちに駅に入ってしまったおう。

(そーいや、うどんに変えてもらうこともできたんだよな……)

次来た時にはうどんを食べるのも良いかもしれない。そんな他愛のないことを考えつつ、俺は駅へと向かう足を速めた。